

「横浜のこれからの都市デザインを考える『未来会議』の報告と今後」

横浜市都市デザイン室の光田麻乃室長、桂有生係長

NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会 2023 年社員総会記念講演

2023 年 4 月 20 日（木）午後 6 時より 7 時 30 分

なか区民活動センター研修室 1 号

田口俊夫ー では、総会の記念講演をこれから始めさせていただきます。皆さんのお手元には既に、きょうの講師のプロフィールが届いていると思います。新たな都市デザインの在り方検討ということで、都市デザイン室長の光田さんと、都市デザイン室の係長の桂さん、桂さんはきょう係長研修だったようですが来ていただきました。都市デザインが、この 50 年どうであったのかについては、ほぼ皆さんはご承知だと思いますが、これから都市デザインをどうやって頑張って、さらに発展していくのだろうか、という大きな期待感を持っています。でも、それは私だけかもしれませんが、それについて、お二方にお話をいただきます。

そして可能な限りオープン情報をご披露いただいて、その後、皆さんと一緒にいろいろな議論をできたらと思っています。小一時間ぐらいですか、お話しいただいて、あと 30 分ぐらいで意見交換にしたいと思っています。その後お時間が許せば、食事をしながら、さらに意見交換できたらと思っています。では、よろしくお願ひします。

光田麻乃 今、ご紹介にあずかりました、横浜市都市整備局の都市デザイン室の室長をしております、光田と申します。きょうはお招きいただきまして誠にありがとうございます。

桂有生 同じく桂と申します。寺澤さんが局長のときに都市デザイン専門職に採用していただきまして、それ以来ずっとデザイン室におります。きょうはなかなか緊張感のあるメンバーなんで、ちょっとどきどきしながらですが、よろしくお願ひいたします。

光田 では、これに入る前に自己紹介といひますか、お手元にお配りしていると思うんですけども、私は 2000 年に横浜市役所に入庁しまして、横浜生まれで横浜育ちです。大学は筑波のほうに行っていました。岩崎駿介さんの研究室にいたんですが、先生はあまり大学におられなかったので、ゼミでお会いするぐらいの関係でした。2000 年に緑政局というところに配属になりまして、新横浜公園整備室という所で、きょういらしている漆原順一さんと一緒に新横浜公園の整備に携わって、ワールドカップ等の施設整備をしてきました。

その後、都市計画局に行きまして駐車場対策ですとか、あと企画課で街づくりの仕事をしてまして、そこまでは建築職として仕事をしていました。その後、係長試験は土木職で受験しまして、教育委員会の学校計画課で学校の統廃合で地域に入ったりですとか、あと公共施設事業調整課、いわゆる技監室にありました。そのときには寺澤成介都市整備局長にもお世話になったんですけども。

光田 その後、みなとみらいのほうに行きまして、みなとみらいのインフラのデッキの整備ですとか、そういったものをしました。課長になって神奈川県土木事務所の副所長を2年間やりまして、今、都市整備局に戻ってきてるような状況です。なので、きょういらしている大先輩がたのように、特に都市デザインについては、ものすごくお詳しくあったり、知見をお持ちの皆さまの前で話せるような者でもないんですけども。今、勉強させていただいたり、普段、日常的に都市デザイン行政をやりながら、今後どうしていったらいいだろうということで、庁内で議論をしていたり、きょう紹介する未来会議というところで、市民の方とも対話をしたりしているんですけども、そういった状況をご紹介させていただいて、方向性について一緒に議論できればいいなと思っています。では着座にて説明させていただきます。

光田 今、冒頭で申し上げたように一昨年、都市デザイン50周年ということで、おかげさまをもちまして展覧会ですとか、あと講演会のほうを皆さまのおかげで終わらせることができたんですけども、展覧会については1万人を超える入場者がいらっしゃいました。特に驚いたのが若い大学生が多くて、初めは都市デザインを知ってるような、仲間内というところであれですけども、知ってる方しか来ないかなというふうに思っていたんですけど、そうではなくて。横浜に興味を持っている方が全国から、場合によっては韓国ですとか、海外からもいらっしゃったような状況です。これまでの都市デザインは、釈迦に説法であれなんですけれども、理念としては魅力と個性のある人間的な都市空間の創造ということで、先人たちが作り上げた七つの目標という理念を掲げながら、実践で、それをどう具現化していくかということで日本大通りですとか、郊外部の川づくりですとか、みなとみらいの景観ですとか、やってきたような経緯がございます。

そういったことを振り返りということで、一昨年の展覧会でアンケートを採ったりだとか、あと有識者だとか携わってきた、この中にもヒアリングをさせていただいた方、たくさんいらっしゃるんですけども、そういったヒアリングをしまして振り返りをいたしました。市民の評価だとか、今後も継続すべき都市デザインの強みというものを今、整理をしているところです。また新たな潮流をつかむことが必要だろうということで、社会の変化だったり横浜の変化というものを知るために、未来会議というものを開催しました。後ほどご紹介をいたします。未来会議の中では都市デザインが人間的な都市空間の創造ということなんですけれども、最後のアウトプットというのは都市空間のハードの空間づくりではあるんですけども、そもそも人間的なところ、要は、どういう暮らしというものが今、これから求められているのかということ、それを突き詰めたということで、ワーキングをしたということです。

なので、未来会議で都市デザインとは、ということはやっておらずで、これから50年先を生きるかたがたが、どういう暮らしを求めているのかということ、会議でワーキングの形でたくさん出していただきました。今後そうしたものをまとめまして、恐らく理念、

魅力と個性のある人間的な都市空間の創造というものは、そのものは継承していくということなんですけれども、その七つの目標をまた整理をし直して、場合によってはプラスオンするものがあるのかどうか、というところもアップデートをした上で、都市デザイン室の役割の再設定というふうに書いているんですけども。どういう役割を社会の中で担っていくべきか、またはアクションができるのかというところをまとめていくのが、今年度になっております。

未来会議の概要なんですけれども、横浜で住み、働き、遊ぶなどの暮らし全般の観点から、横浜、社会の状況の変化をとらまえて新たな潮流をつかむということで、庁内の方にとどまらず、市民ですとか企業のかたがたにも公募でお声掛けをしました。都市横浜の未来を共に考え、個性と魅力ある街づくりについて、幅広いアイデアを共有する全6回のワークショップを、ご覧のような形で夜6時半から8時半の間の全6回、来ていただきました。平均年齢38歳ということで、横浜市職員は16名来てくれて、区役所だとか、あと港湾局、建築局、医療局、市民局、環創局、道路局ということで、普段、私たちも仕事でなかなか会えないような、市民と密接に関わるような所の部署の方も来ていただきました。

また大学生も東京大学、早稲田大学ですとか、普段から街づくりに興味のある学生が多かったですけれども、5名参加。あと会社員ということで、企業の方も来ていただきました。あとは自営業の方、4名というような体制でした。全6回なんですけれども、進め方としては右側のグラフを見ていただきたいんですけども、30年から大体50年の間に、どういう暮らしを実現していきたいかということの、このブルーのところから始め、グループワークで意見を出し合いました。その暮らしに対して、どのようなプロジェクトが自分たちはできるだろうかということで、その後、続けてプロジェクトアイデアを出していくというようなやり方でやっていきました。

こういったプロジェクトを30年から50年の間に積み上げることで、こういった実現したい暮らしが実現できるというような、こういった形になっています。グループワークは4回、5、6は個人ワークということで行いました。そのグループワークを5グループに分けたんですけども。テーマ設定の仕方なんですけど、今まで横浜というのは東京に対してのベッドタウンとしての横浜、二元的な形の東京に対する横浜ですとか。横浜の中でも、どうしても横浜のイメージというと、都心部のみなどみらいの海に向かって低くなるような、海を大事にしたことをメッセージを送るような、景観ですとか、そこがかなり横浜のイメージ、都市デザインのイメージになってたと思うんですけども。これからは各エリアにある横浜の大切な宝を磨きながら、おのおのの場所の個性や魅力を高めていきたいということを、未来会議を開催する前に話し合いました。

一つが都市デザイン横浜の継承と革新ということで、未来の普遍的価値を見つける。七つの目標だとか、個性と魅力ある人間的な都市空間の創造ですとか、そういった定義そのものを考えるのが1グループ目。2グループ目が都心部の可能性ということで、海港の街のこれまでとこれから。都心って、これから要るんだろうかとか、都心部って何だろうみたいなこ

とを話すのが二つ目です。三つ目が海をひらくということで、横浜の大切な資源の海を、今まだ閉じられてるところがかなり多いんですけれども、そういったところをどういうふうに変革できるだろうかというのが三つ目ですね。四つ目が水と緑と農のある暮らしということで、今でいうところの郊外に当たる所なんですけれども、横浜らしいライフスタイルを郊外で考えるグループ。

5番目としては人の暮らしを考えると、どうしてもコミュニティーの話になっていくんですけれども、そういった横浜のコミュニティーの再生、集まって暮らすことの意味を考えるとというようなことを議論するグループの、五つで議論をしました。未来会議やる中で毎回ゲストの講師の方から、少しインスパイアしていただくような講義ですとか、あと、もっと手前のところでメンターという形で、都市デザイン室にも寄り添っていただきながら横浜国立大学の野原先生、今、都市美対策審議会の委員もお願いしてるんですけども、野原先生と、あと横浜市立大学の三輪先生。三輪先生は金沢区でシーサイドあしたタウンの理事ですとか、こどものための都市環境だとか、環境心理学というのがご専門なんですけれども、そういった暮らし専門の先生も、今回メンターで入っていただきました。

野原先生のほうからは、まず都市デザインとはということで、基礎となる都市デザインって何だろうということを分かりやすく、初めて都市デザインに触れる方もたくさんいらっしゃったので、街を変える仕組みですとか、または運動とか活動になることもあるですとか。あと都市デザインというのは、最後は一つしかない空間を、一つの場所にいろんな人の思いがあると思うんですけれども、そういったものを思いを乗せて、一つしかない空間をどうしていくのかということを考える大切なものですよ、というようなお話ですとか。

都市デザインは世界のイノベーターになり得るということで、横浜市が歴史を生かした街づくりというのを始めたのは1980年代なんですけれども、当時は歴史を大事に都市デザインをしていくというのは、かなり先進的なのか初めての打ち出しだったということで、そういったイノベーターになる要素も持っていますよ、ということの話をいただきました。やはり時間がたつと価値が上がるような仕組みづくりが大切であるですとか、都市デザインというのも何かに掛け合わせてやっていくということで、大田区の工業地域の場づくりみたいなことも事例で教えていただいたりしました。

次、三輪先生なんですけれども、三輪先生は横浜という所が合併をそもそも繰り返してきたエリアで、武蔵の国は江戸、相模の国は湘南を向いているということで、どちらかというと人の生活というのは、あまり行政区というよりは、そういった生活圏みたいなものが初めにあって、その後、行政区ができたというような歴史を紹介していただきました。

あとここ、すいません、あんまり情報がなくてあれなんですけど、都心部と郊外というのも先ほどの図であるんですけど、その中間エリアとして保土ヶ谷、鶴見、神奈川、南、港南、磯子のような都心から近い既成市街地というか、下町のようなところがあるというのが横浜の特徴で、そういった三つの区分、都市、郊外、その間というような所でできてますよ、という空間の話をしていただいたり。人の生活圏という話では、どちらかというと中学校区

というのは、非常に人の生活圏をつくっていますということで、福祉の分野でいうと地域包括ケアの範囲になると思うんですけども、人の社会的なつながりというのは区というよりは、そういった中学校区で考えるといいというようなお話をいただきました。

あとは、横浜は急激な市街化が当時起こったわけですけども、そういったことで緑地がぼつぼつと点在しているのも特徴といえば特徴で、まとまった農地がないというのはそうなんですけれども、逆にいうと市民の生活のすぐそばに農地ですとか緑があるというのが、埼玉や千葉とはだいぶ違うと、恵まれた環境だというようなことを教えていただきました。先ほども、暮らしということなんですけども、人は大体、地域に入っていくのって3回ありますよみたいな話がありまして、一つが、自分が子どものとき地域で生活をします。二つ目が、自分の子どもができたときに親として地域に入る。最後は退職をしてまた地域に入るという、3回そういうチャンスがあるということで、子育てを街でやってみようというような取り組みを今、金沢区のシーサイドタウンでやられています。

そこではいろんな分野の緩い場ということで、並木ラボという所をつくってまして、そこで実験的に公共サービスを、地域でお互い作っていけないかというようなことを今、実験的にやられています。ということで、そういった、これからは都市デザインの中に、そういう暮らしからデザインして空間をつくっていくということを、どう組み込めるかということに先生も興味があって、チャレンジできる部分じゃないかというような話がありました。

続いて2回目は、水辺総研という所を設立した滝澤さんに来ていただきました。滝澤さんは今、全国の水辺の街づくりですとか、グリーンインフラの計画をされてまして、横浜市も流域治水の計画づくりですとか、帷子川沿いの、実際の地域に入って川づくりをされてる方です。滝澤さんの話の中では、緑の十大拠点という横浜の大事な宝を生かしながら、流域治水の取り組みというの、ふかんすると一つのつながりなんですけれども。一つ一つ下流域、中流域、上流域で、そこで市民参加で治水に貢献できるような市民活動をして、その市民活動が治水にどういう影響を与えているのかということ、市民が理解しながら街づくりに参画できるというような、そういう今、取り組みを実践されているんですけども、そういうことも都市デザインの中でやっていけるんじゃないか、ということをお話いただきました。

続いて3回目は伊藤さんに来ていただいたんですけど、伊藤さんは元横浜市の市議員を3期やられた方で、議員のときは、公民連携の政策を積極的にやられてたような方です。その後、民間のほうに行きまして、ソーシャル・エックスという会社を立ち上げて、逆プロポといって通常、何か事業をやる時行政がプロポを発注するんですけど、企業側から発注するというような事業を立ち上げています。伊藤さんのお話の中では、今8分野はもう公共じゃなくて民間もやる時代になってますということで、国のほうでも挙げているのが防災、健康、医療、介護、教育、子ども、インフラ、港湾、モビリティ、農林水産、食みたいところが、準公共分野ということで位置付けられているそうで、企業のほうも今、時代の変化の中でサービスを考えていくときに、お金を出してでも社会課題を知りたいみたいな状

況になっていますというようにお話をいただきました。決して公共事業を行政だけが抱え込む時代ではないというようにお話をいただきました。

実際、伊藤さんは逆プロボといわれる手法で、こども食堂のDXプロジェクトということで、こども食堂がうまくいくための、需要と供給をマッチングするようなシステムみたいなものを、企業の提案で実現をされたりされてる方です。これからは官民競争でやっていく時代にどんどんなってくるんじゃないか、というように話をいただきました。

続いて第4回目は東京大学の羽藤先生に来ていただきまして、あと野原先生と三輪先生と、4回目だったんでグループ発表があったんですけども、その発表のコメントをいただくという形で進めていきました。その中で羽藤先生なんですけれども、交通のこともやられているんですが、愛媛のほうでアーバンデザインセンターの所長をやられていたり、私が説明するようなあれじゃないかもしれないんですけど、キタザワ先生の所で東京大学に今、在籍をしながら世界の仕事もされています。

羽藤先生からは横浜の未来の状況というのは、多分かなり変わってきていて、コロナを経てリモートワークを経験して、どちらかというと、テレワークなんかで東京に行かなくても家で仕事をしたりだとか、ネイバーフッドって言うんですけども、近隣概念がこれから都市の中では変わってくるんじゃないか、というようにお話がありました。近隣に根差しながら新しい生活をしていくときに、家の在り方とか集合住宅の在り方というのは、実は変わってくるんだけど、まだそこは空間とか設計のほうでは追い付いてないというか、発明できてないところなので、そういったことを考えていく必要があるんじゃないか、というようにお話がありました。

あとローカルアイデンティティーというワードは私のほうから出したんですけども、横浜の本当の良さというのを共有できるといいということで、近々リニアが通ると思うんですが、あれができると東京は山梨まで20分、40分みたいな世界になると。東京はどちらかというと山の価値を獲得をしていくんだけれども、横浜はリニアが通らないので、そこから外れたような感覚も持ちがちなんだけれども、逆に海があるということを少し差別化をして、横浜ならではの個性というのを発揮できるチャンスと捉えて、街づくりの方向性を定めていけるんじゃないか、というように話をいただきました。

あと15年前に羽藤先生は今、都市デザイン室と一緒に未来社会の設計ということで、桂さんもそのとき行ったと思うんですけど、同じようなワークショップをやったそうなんですけど、私はそのとき参加できなかったんですけども。当時はキタザワ先生の強い先導の中で、ワークショップとそのアウトプットみたいなものが出てきたけれども、今回の未来会議をやってるような時代というのは、むしろ一人一人が考える時代、それをどうしていくかって、つないでいくってことはすごい難しいんだけど、そこが15年前とは、だいぶん状況が違うというようにコメントもいただきました。

最後に東京都市大学の坂倉先生に来ていただきました。坂倉先生はコミュニティーマネジメントのご専門で、世田谷のおやまちプロジェクトとあって、尾山台の商店街で拠点づく

りをされている方です。ウェルビーイングについて、ウェルビーイングって何だろうというようにお話を初めにいただきまして、一人一人が心を満たされて生き生きと暮らができる社会というのを、住民主導のボトムアップで作りながら、地域社会の課題を解決するためのイノベーションを生み出す、みたいなことを実地でやられているということで、さまざまなお話をいただきました。実際、こども食堂ですとか、パン屋さんですとか、商店街とか商店街店主とか普段生活で会わない方が、創造的なエラーというふうに呼んでたんですけども、普段生活の中では決して出会わない方が出会えるような場所を設定すると、思わぬエラーが起こると。こんな解決方法があったんだというようなことが、どんどん起こるということを実際やりながら、それを研究をされている方です。

ここからは実際、未来会議でまとめていったグループのまとめをご紹介します。一つが『都市デザイン横浜の継承と革新』というところなんですけれども、これまで人間中心の定義をして都市デザインをやってきたんですけれども、市民一人一人の暮らしを自由に選択できる都市というふうに、捉え直すことはできないだろうか。今までヒューマニティーみたいなことで呼んでたんですけれども、これからは個々、違う価値観の中のパーソナリティーをお互い認め合って、後で桂さんに少し説明、補足いただこうかなと思ってますが、ヒューマニティーからパーソナリティーという概念が中心になってくるんじゃないかということですね。あとは場と人、人と人、場と場ですとか、そういったそれぞれのつながりの間を、デザインをしていくということが、重要なんじゃないかというようなことが出ました。

あと、さっき出したんですけれども東京と横浜とか、都心と郊外という二元論の価値観から多元的な価値観を実現する都市になっていくだろうし、していくんではないかということで、プルリバースという言葉が出てきたんですけれども、プルリバースというのが複数の世界という意味だそうなんです、プルリバースシティというような表題というか、単語が生まれてきました。

これからは、今って、なかなか経済も成長して、誰でも生活も選択できるようにはなっているとは思いますが、なかなか選択したくなるというか、できるんだけどもしないっていうところを、どうやって選択したくなるようにしていったらいいだろうかというのが課題だね、ですとか、あとはパーソナリティーとかっていったときに、ダイバーシティですとかケア、あと福祉の概念が必要じゃないかということで、今まで健康な人という用語があるかもしれないんですけれども、すごく都市デザインを考えると想像していた方というのが、少し狭義だったんじゃないかと。これからは、もう少しダイバーシティというのを実現できるような、そこにいない人をいかに想像して都市をデザインしていくかということが、大事なんじゃないかというのが結論の一つになっていました。

続きまして二つ目の都心班なんですけれども、絵を見ていただくと、あれが実はハンバーガーみたいになっていて、オレンジのところはパンなんですけど、その間が具材になっています。都心部に集まる人々の生活シーンの異なる様子をハンバーガーに見立ててまして、生活シーンが交わる点をピックとって、灰色の縦線がハンバーガーを突き刺すピックな

んですけれども、そういったふうに都市を捉えています。都心部に集まる人たちが好みの具材とピックを選んでいくことで、充実した生活ができるようにならないかということで、タイトルとしてはカスタマイズ・バーガー・シティーというような、キーワードというキーワードを出していました。

いわゆる都心で、そういうさまざまな暮らしを貫くピックが一体、何なのかということ、これから具体的に考えていきたいということで、例えば公共空間だったり、都心部でいうと低層部であったり、水辺であったり、そういうところなのかもしれないです。もしかすると人なのかもしれないんですけども、あとはイベントとかですね。そういったピックが何なのかということを実際、都市デザインの中で考えていけたらということですね。あと、多様な暮らしが、先ほど具材って言ったんですけれども、その多様な暮らしというのは遊ぶですとか、働くですとか、学ぶとか、食べるとか、育てるとかですね。そういう具材をたくさん埋め込むということも一つ、必要だねということでした。あとはピックとピックをつなぐような手段ですね。モビリティですとか、そういったものを考えていくことも重要だということでは出ていました。

続いて3番目のグループなんですが、『海をひらく』というタイトルです。今、横浜の海岸線というのは埋め立て地なので、ほとんどの所が閉じられているんですけれども、これからは一般に立ち入りができる、海に触れられる場所をつくっていったらいいんじゃないかというような話ですとか。あと産業の構造の変化もあって、製造業がつぶれて物流になったりとか、そういった変化だとかもあるので、ちょっとずつ土地利用を転換、海に近づけるような土地利用に転換していけないだろうかという話が出ていました。あとは横浜の海というと、今、都心部のみなとみらいで山下公園の前の様子が出てますけども、もうちょっと多様な海の在り方、海の価値というものが横浜の価値にならないかということで、金沢区のほうには今、浜辺もありますし、子安のほうには子安浜ですとか、いろんな形の海があるんですけれども、そういったさまざまな海の多様性の価値を、もう一回、見直すということが個性ある街づくりにつながらないかというような話が出ていました。

あと二つなんですが、四つ目として水と緑と農のある暮らしという班です。ここでは横浜らしい緑というのを生活に点在する小さい農地ですとか、宅地開発で残された森ですとか樹林地、暮らしの近くにある森ですとか、あと川ですね。上流から下流まで、その先の海まで流域ごとに表情が違う。そういった水辺みたいなものの3点を、活用していけないかというような話が出ていました。都心から今、3、4キロにある田舎の風景みたいなものが横浜の良さの一つでもあるんですけれども、そういったものを50年後に残していけるかというのが、これからの都市デザインのポイントの一つになるですとか。あと、デジタルの時代になると、なかなか自然と向き合って自分の中の野生を呼び起こすみたいなことが、自然には力があるということがかなり皆さんから出ていまして、そういう野生を呼び起こす横浜の街みたいなものも、つくっていくのはすごく面白いんじゃないかというような話が出てました。

最後に横浜のコミュニティーの再生のところで、コミュニティー班というところなんですけど、人口減ですとか、住まい方や働き方が変化している中で、国籍、障害、年齢、価値観など多様性を尊重し合う社会、コミュニティーが、従来の家族だとか、会社だとか、趣味からより細分化されて、いろんなコミュニティーを自由に選択し所属できる社会というのが今、求められているということで。かなりこの班の議論が熱かったんですけども、いわゆる準備されたコミュニティーではなくて、自分たちがつくり上げたり、自由に出入りできるコミュニティーというのが、もっとできないだろうかというような議論が繰り返されていきました。自分がやりたいことをやると、どちらかという自分のことしか考えてないような形なんですけど、自分がむしろやりたいだとか、好きだとか、楽しいみたいなことが逆に、その地域の社会のためになるというような、そういうマッチングできるシステムというのを具体的に考えていけないかというようなことで、この後、個人ワークの話が出てくるんですけども、そちらのほうの提案につながるような議論がありました。

ここからは各グループのワークが終わった後、個人ワークになったんですけども、その個人ワークのいくつかを紹介したいと思います。一つが、これは都心班ですね。都心班の人や企業をつなげるショーケースということで、今すごく、若い子たちもずっと SNS とかインスタとかで、オンラインでずっと人とつながっているような状況もあるんですけども、オンラインのサービスが充実しているんですけども、リアルだから体験できることというのが、都心部には求められているんじゃないかというのが、この方の骨子になります。インターネットというのは、とてもすごく個人の興味に基づいてどんどん展開をしてくるんですけども、いわゆる都心の公共空間とか都心には全く知らなかったり、自分が求めていなくても見えてきたり、偶然の出会いみたいなのができるというのが、都心部の空間の意義みたいなふうになっていくんじゃないかということですね。

今までも都心部というのは人と物が集まって、新しい商品やサービスが生まれてきたようなところもあるということで、知られざる魅力とか、実は面白い人が眠っていたりもするということですね。誰もが発信源となり、自らの興味や関心、事業、活動を横浜の魅力として伝えて、人や企業をつなげていく場所、この場所というのが、さっきのピックということになると思うんですけども、そういうショーケースを街に増やしていきたいということで、どんなことをするのかとか、どんなスペースでやるのかとか、どんなスキームなのかと、どこでやるのかというのはさまざまあったんですけども、そういったことを都心部の中で制度として展開をしていきたいというような話でした。

続いて海班のこの方なんですけども、今、『横浜、海の駅』って検索すると4カ所出てくるみたいなんですけど、主にプレジャーボートというか、そういったもののマリンレジャーの拠点になってる所なんですけど、海の駅といってもなかなか、誰が入れるわけでもない。限られた人しか入れないというようなところに、すごく疑問というか課題をこの方は感じていて、これらの施設を誰でも入れるような形にして、海をつなぐ地域の足でも、公共交通機関のようなくらい水上交通でつなげると、新しいネットワークだったり、海遊が生まれる

んじゃないかというような提案でした。実はこの方、車の会社の方だったんですけども、もう車がなくても車に依存しない、新たな移動手段を増やしていくことを目指すべきではないかというような提案でした。

こちらは、さっきの郊外班の方の具体的な提案なんですけれども、横浜で楽しむサブスク農場プロジェクトということで、アプリなんかで実際、月額料金を支払えば、市内の農地と農業に必要な道具類を自由に借りて農業を行うことができる仕組みをつくりたいということで。道具だとか農地をアプリで申請して、手ぶらで農地まで行って、実際に農作業が楽しめるということで、実際にこういったシステム、多分もうあると思うんですけども、こういったことで農と暮らしというのが、もっと身近になるんじゃないかというような話でした。

こちらは最後のコミュニティー班になります。この方は団地の中にバス路線があって、バス停があるんですけども、そのバス停の近くにある空間というのは道路ではなくて、私有地というか、道路ではない空間がかなり余白があるというところに目を付けまして、実際にやりたいをかなえる余白スペースとして、住民が1日に数回立ち寄れるような、何か拠点をバス停の近くにつくれないかというような提案です。そこでバス停なんて待ち合わせをしたり、子どもの帰宅待ちをしたり、散歩の休憩をしたり、朝ご飯が食べれたり、帰宅前にそこで1杯飲めたりとかいうことをしていくことで、コミュニティーを形成をしていけないかということで、実際にこういうような形ですとか、運営体制なんかも詳しく提案はしてくれました。

最後に未来会議で出てきたキーワードを出しているんですけども、一つは多元性ということで、今までヒューマニティーからパーソナリティーへと書いたんですけども、やはりいろんな多様な価値観が生まれている中で、そういった多元的な社会であるということ为前提に、都市デザインを考えていくということが一つあります。一人一人が選択できる暮らし、カスタマイズしていく暮らしというものをつくっていきけるような空間づくり。あと、つながれる場や、ソフトのデザインって書いたんですけども、ハードだけではなくて、そういった仕組みも含めてデザインをしていく時代なのかなということが一つです。

二つ目が官民競争というふうに書いたんですが、準公共という分野、先ほどご紹介したんですけども、社会課題は官民で取り組んでいく時代になっていくということです。あとは自然資源の価値化ということで、横浜が残してきた都心に近い身近な自然を再評価をしたりですとか、次世代の海の価値というのを多様化していくということ等々ですね。

あとはデジタル化、ICTを積極的に活用することでコミュニティーの在り方ですとか、新しい市民参加の在り方みたいなものも、これから考えていきたいというふうに思っています。あと都市デザインというのは、もともとやってきたことを振り返ると、おっきな、ふかんしたトップダウンと書いたんですけど、大きな都市デザインと、六大事業もそうかもしれないんですけど、実際そこで暮らす方が、その都市を享受できるようにするという、ボトムアップとの調停というふうに野原先生はおっしゃっているんですけども、その調停をするとい

う、そのところが都市デザインが担うところなのかなということを今、あらためて書いています。

それと、やはりこれまで忘れていたというか、あまり都市デザインで対象にしていなかったみたいな、ダイバーシティみたいなこともきちっと、そこにいない誰かを想像して都市空間づくりをするということが、これから大事になっていくということをまとめとしていきたいと思います。これからは未来会議のまとめとしてというか、実際に今、私が話したようなことを現地に当てはめてみると、どんなことができるだろうということで、金沢区を事例に書いてみたものがあるので、ここからは、桂さんのほうにお願いしたいと思います。

桂 あと15分ぐらいですかね。ささっとまとめるんですけど都市デザインの未来を検討していく中で、もともと都市デザインって飛鳥田市政から始まっていて、市民の暮らしにどうやって寄り添っていくかというところからスタートしていると思うんです。今、実際、多くの取り組みというのは都心部に、郊外展開とかしていたり、いろいろしてるんですけど、やっぱり都心部に重点的に投下してきたという側面はあって、50年かけて都心部は横浜を代表する、分かりやすく横浜って、こういう場所だよねということを対外的にも、中の人たちに対しても認識してもらえそうな実績というのは生まれてきた。

50周年を迎えて、都市デザインを再定義しようといったときに、市民の暮らしに寄り添うようなことをしていけないかというのは、一番最初の取っ掛かりとしてあって。なので、先ほどの、ふかんの的にマスタープランみたいなものを書いていくというよりも、未来会議で新たな暮らしを描いてもらって、その望まれてる暮らしからその実現のツールとしての都市デザインは、どんな役目を果たしたらいいのかなというのを考えていきたいねという話をして。ただ多分、両方要るんですよ。ふかんの的な街づくりも当然ながら要るし、行政が主導的にやっていく面的な開発みたいなことも要るし、一方で市民が小さく描いてくる暮らし。

先ほどトップダウンとボトムアップの調停みたいな、なかなかいい言葉が、トップダウンとかボトムアップというのも多分違うし、都心部と郊外というのも違うんですけど、適切な言葉がないので、そういった言葉で代替しています。

グループワークは、みんなで一回、遠い未来の暮らしを描いてみて、それに向けて個人とか自分の思うところ、やっていくとよいことはこんなことだって、個人ワークに途中からなる変則的な、そもそもワークショップだったんです。やってるうちに、この未来会議で得られた結果って、どうやって使うか、ちゃんと参加者に説明しないと、うそでしょって話になって一回、金沢区で書いてみますねという話をして描いたのが、これですね。

都市デザインって、理念とプロジェクトの両方を横断しながらやってきた、理念だけということもないし、プロジェクトだけをぐるぐり進めていくというんじゃなくて、進めながら、そこに都市デザイン的な要素を差し込んでいくってことをやってきたので。庁内的にも少し動かすようなツールというか提案をしていこうという中で、金沢区は、歴史も海もあって、

山もあってという意味では、すごく横浜の、縮図的。南部にあるので人口減少とか、課題もあるというところで、一回、金沢区を取り上げようということで、考えてつくった。ですので、急ごしらえなんですけど山と海の両方の自然がある横浜らしい暮らしを金沢区で描いてみよう。

そのときに今後はコロナの話もあって食、住、遊、学が近接していく。もともとシーサイドタウンと工業地帯というのは職住近接なんですけど、一方で海を切り離してきたというか、諦めてきたっていう形もあるので、そういったところをどうしていこうかねという提案なんです。金沢区は京急と 16 号と、あとシーサイドタウンの所で縦に動線が走っていて、それによって大きく 3 分割されていると。山側の住宅地と、シーサイドタウンに代表されるような住宅地の平らな所と、新しく埋め立てた工業地帯みたいな形になっている中で、本当はシーサイドタウンなんでシーサイドにあってほしいんですけど、実はシーサイド・サイドタウンみたいになってて、海から切り離されているというのは、実にもったいないなというふうに思っている。

一方で横浜の都心部なんかよりも、よっぽど古い歴史があって、しかもそれが称名寺と市民の森みたいな形で、緑と連結されながら残っているというところに、可能性あるんじゃないかということと、あと人口減少があったりとか、丘陵地の高低差が高齢化と合わさって交通空白地が生まれているとか、でも一方で市大、関東学院という二つの大学があって、いろんな主体が、実際にもうコミュニティーづくりだとか、拠点づくりとかも始まっていて、可能性はすごく大きい。

製造業として始まった、LINKAI と呼ばれている工業地帯が少しずつ物流に機能が転換していったりだとか。台風で LINKAI の護岸がだいぶ破壊されて、それを修復する過程で、随分また高いやつが建っていて、海、また切り離す形になってるんですけど。でも一方で、それを釣り人たちに開放していこうということも、一応考えられている。小柴の基地跡地とか、そういう可能性を総合して考えていったときに、先ほどから出てきた未来会議の五つのテーマ。そこらいい提案がいろいろあったので、一つは海をひらくというのは、金沢区最大の魅力である海を暮らしに取り戻したいということですね。

例えば漁港なんですけど、経済局とかが漁港を開いていく、観光資源として使っていきたいみたいな話があったりとか、あと LINKAI に集まっている企業だとか、新しく造られてる物流の施設とかに、スタッフ向けなんですけれど、ちょっといい施設みたいな、実は抱えていたりとかして。それを市民利用とかエリア利用というか、ちょっと開くという活動をするだとか。

あとは護岸ですよ。海にアクセスできるような仕掛けを都心部は臨港パークとか、象の鼻パークとか公共空間につくり替えてきたと思うんです。多分このエリアでは持ってもらったまま、どうやって少し開いてもらうかみたいなことをトライアルしていく、何らかのインセンティブで開いていくみたいなことを考えて。

水上交通もトライアルはいっぱいあるので、何らかの形で定着させていきたいねとか、あ

と工業団地がいろんな知を持ってる、大学と合わせて、うまくそれを共有財産としていけな
いか臨海部自体の価値をうまく共有知にしていく、開いていくということができないかな
というのを、『海をひらく』という言い方をしています。

山のほうも同じで、線引きのときに非常に細かく残してくれた身近な緑なんですけど、価
値化できてないところがあるので、それを新しい体験の仕方であるとか、身近な存在として
価値を高めていくことできないかな。沼津の Inn The Park とか、横浜だとフォレストアド
ベンチャーみたいな、民間と組んでいくことによって公園を開く仕組みってよくあるし、歴
史的建造物の中で、例えばヨガができるとか、そういった違う体験と重ね合わせて、ここに
しかない価値を生むってことできないかな。あと自然ときちんと子どものときからつなが
れる仕掛けみたいなのを、例えば小柴の公園つくっていくときにちゃんと仕掛けていくこ
とで、子育て世代にとってより暮らしやすい街に近づけていけないかなというのが、山を身
近な存在にしていくってことですね。

あと住宅地、これもいい言葉ないかなって思ってるんですけど、出来上がってから 40 年、
50 年たってるんで、ちょっとずつ個性を獲得し始めてるのが感じ取れるんですけど、でも、
やっぱり住宅地だよねみたいななともあって。

自分の住んでいるエリアの滞在時間が延びれば、そこの価値を上げていこうという人た
ちも現れるだろうし、もうちょっと、小商いやってるとか、自分の周りに行きたくなるよう
な場所というのを、増やしていくってことできないかなということを考えていて。それと絡
めて農をやったりだとか、今、コンセプト系で街とか住宅を開いていくことって、かなり出
てて。金沢だと八景市場というシェアスペースを持った集合住宅、シェア住宅みたいなのが
あったりかして、こういったところでうまく住宅地をアップデート、アンド、多機能化し
ていけないか、脱住宅地ができないかなということ提案しています。

そういったものをレイヤーとして重ね合わせていったときに、今、縦にしかない動線とい
うのを、この横つなぎ、新しいモビリティでつくっていくと、一つ大きな価値になるん
じゃないかなというふうに、金沢の場合は思っているところです。

これを三輪先生にお見せしたところ、ふかんじゃない？っですって話になって、ちゃんと
生活目線、圈って言ってるものをちゃんと考えなさいって言われたので、断面図を描いた
りしてしまして、先ほどの個人ワークで出てきた提案というのを、金沢のほうに翻訳してち
りばめていったものと、金沢の実際の状況に合わせて描いていったというようなものでは
あるんです。実際、歩いてみたりも結構したんですけど、いいはいいですよ。

住みやすいとか、高齢化したときにずっと住み続けられるかって話が、高低差の話はあ
るんですけど。でもすごく歴史も感じられるし、京急のつくってきた住宅地って、憧れの
郊外ライフというか、高級住宅地だったんだろうなというのを感じさせる所なので、ちゃん
とアップサイクルしてあげれば、まだ可能性は十分あるんじゃないかなというようなこと
を庁内の中でも共有しています。実際のプロジェクト化と併せて、都市デザイン室の在り方
というのをリニューアルしつつ両輪でそれぞれを関係させ合って、新しい都市デザインと

いうのをつくっていけないかなって、思っているところです。

光田 最後に、都市デザインが始まったときのような、高度経済成長期で黙ってても公共事業は進んだりとか、民間開発が起こったりとかという時代ではなくなってくる中で、街をどういうふうにしていきたいんだということを、まず案を、こうしませんかというものを、ビジョンを共有するというのが、これから非常に大切になるんじゃないかなと思います。それは企業さんとやるときもそうですし、実際に担い手となる地域の方を巻き込んで、小さな都市デザインをやるときもそうなんですけども、そういう具体的なビジョンを示す役割が、これからの都市デザイン室にあるのかなと思います。

あと、きょう全部公開で録音ということで、どこまでというふうなところもあるんですが、都市マスタープランの改定、今してまして、その都市マスの中で土地利用戦略ですとか、規制誘導とか区域区分みたいなものも議論してるんですけども、そういったものとの関連とか連携とかというの、きちっと市内の中で位置付けをして魅力的な空間づくりを、どちらかという都市デザインは手法だと思うので、を提案できるような組織に、これからしていきたいなというふうに思っています。以上です。ありがとうございました。

田口ー 皆さんのほうでいろんなご質問とか、ご意見とかあると思いますんで。

遠藤包嗣 私のほうから最初に二つぐらい確認というか修正しといたほうがいいなと思ったのがあって。

桂 はい。

遠藤 並木に住んでいますから、まず1点はシーサイドタウン。ウオーターフロントじゃないんだけど、あそこは船だまりがシーサイドの要で、哲学のポイントだからね。

桂 はい。もともとの海岸線に合わせて緑を考えていたという。

遠藤 そう。

遠藤 はっきり言ってウオーターフロントというのは商業系のエリア以外は、要は漁業の人以外住まないんですよ。普通の住宅の人は天気が良くて気持ちがいいときに、海のそばに行きたいというはあるけれども、日常的な空間には絶対ならないんです。ただ僕らはプランニングの中では、当然ウオーターフロントを市民のために生かしていこうということで、遊歩道を一応、作っておいたけれども、それも基本的には陸から海を楽しむしかできないん

です。浜辺は別だけどね。浜辺は水の中、入れるから。いわば水から陸を見ることもできるという、そういう楽しみ方ができるんだけど、普通の遊歩道系の所では、どうしても陸から海を楽しむことしかできないんです。

だから横浜の新しい魅力の中で、僕が日本丸に行ったときに頑張ろうとしたのは、海から陸をどうやって楽しめるかということで、シーカヤックを含めて花火のときに海に出てくるといのは、これは夜の仕掛けとしては一つのイベント、お祭りとしてあるんだけど。日常的なという形で考えると、さっき言ったヒューマン、市民じゃなくて住民、ないしは個人的な個人という形になると、やっぱりその個人が楽しめる空間を、ないしは装置をどうやってつくるかということで、日本丸で実験後、定着させようとしたんだよね。だから海ってすごく横浜の魅力になるんだけど、ストーリーを本気にもう一回、考え直さないと無理があるよ、というのが1点です。

もう一個、気になってるのは市民から住民、ないしは地域のさまざまな、言ってみれば高齢者から子どもたちから、それぞれニーズをいろいろやっていくとなると、やっぱり今、僕らも課題として意識してるのは児童公園の在り方ね。それからセミパブリックスペース。要は道路の脇がどうのこうのって言ってたけれども、集合住宅や高層マンションやなんかのときの公開空地みたいな、そういうセミパブリックスペースに対して、どういうふう考えていくかっていう議論がすごい気になってるわけ。どちらにしる道路にしたって公園にしたって、半分以上は住民管理の応援がない限りできないわけよね、ああいう管理したって。だからそういうなったときに、つくり方をどう考えるのかというメニューを、少し考えておくといいんじゃないかという、一応、以上です。

光田・桂 ありがとうございます。

桂 公開空地とかも僕が入ってすぐぐらい、15~16年前は環境設計制度（〇環）とか使うときも、こんな提案じゃ〇環には、値しねえよって、結構突っぱねてた。許可案件なんだから、と言ってたのが、今は、おおむねチェック表で条件そろっちゃったら、もう許可下ろさざるを得ないよねみたいな運用に、随分変わってきちゃって。もともと意図していた都市環境をどう良くしていくとかという視点というのと、ルール化してしまったが故にルーティンになってしまってるところとの境が、すごい難しくなってしまって、そこをちゃんとすればいいじゃんという話でもあるんですけど。そのセミパブリックのつくり方とか、使い方の話も、公開空地もうまく使っていいよという状況にもなく、空いてればいいよというの、課題がある。何らかの形で意思を持った街づくりをしていくというのが六大事業というか、その頃の街づくりの迫力なんだろうなというのを感じていますね。

遠藤 それは昔の話だから。

桂 そうなんです。今の時代にどうやったら少しでも取り戻せるのかは課題として持っていて、それで先ほどのトップダウンとボトムアップと、両方の間に入りたいっていう話そこから上位の計画にも、実際の空間づくりのところにも影響していきたいというのを思っていて、エリア・コンセプト・ブックとかを民間に託すときの直前に、横浜市の意思表示として、こういうのを実現したいから、あなたたちと協働したいんですよというのを出すようにしてるんですけど、今できてるのは、そのくらいのことなんですよね。それがすごい歯がゆいところかなと思って、今の話は伺ってました。ありがとうございます。

南学 それに関連して、南といいます。実は北澤さんと一緒に入ったんです。

桂 レジェンドばかりしかいないから、この会つらい。笑

南 だから田村さんと、そのときに会って20年間ずっとまちづくり研究会、漆原さんなんかと一緒にやってたんですけども退任されて、その中で、もう2000年では完全に市役所辞めちゃって、大学に転出したりしてやっていたんです。僕は聞いて、何のための都市デザインなのかなというのが見えなかった。つまり何かというと、私がいたときは少なくとも横浜の都市デザインだったんですね。だから横浜というのは一体何だろうかってなことを考えながら、少なくとも都心部って、まさにそこに集客、あるいは快適な空間、あるいは投資ができる。

そんなところで、初めてですから、そこに入ってやったら、すごく効果が、ものすごい大きかったなと思うんですけど、今、聞いてみると金沢区とか、いろいろ居住空間とか出くると、これ都市デザインの概念をもうちょっと精緻に、きちっと概念変えていかないと、居住空間なのか人を集める空間なのか。今、遠藤さん言ったように、まさに都心部、つまり人が住む所と集まる所の区別が全然ついていない。反対しているわけじゃなくて、金沢は私がいたときも、金沢区とか独立して全部の機能を持つてる所だね、なんて議論をしたことがあるわけですね。都市機能もあれば、居住空間もあれば、緑もあれば、海もあれば。あそこは多分、横浜の中で一番特異的に独立できちゃう。

それはともかく、一つ言いたかったのは、横浜のというのは一体何なのかというのは、実は都市科学研究室が企画部調査課に変わって、調査課長をやってたときに、横浜の魅力をどういうふうに考えるかというのを当時議論した。1997年か1998年かなんですけど、残ってると思うんですけど市民意識調査というのをずっと、その前の40年やってきて、1回も横浜というのは何だというのは取り上げてなかったんで、一回、横浜というのを考えてみようということでやった。そのとき非常に面白かったのは、これは当然そういう結果が出るだろうと思って設問を作ったんですけど、あなたはどこに住んでいますか、という時に横浜、あるいは戸塚区、何々区、あるいは神奈川県というのをいくつか選択肢やると、まずほとんどが、もう95パーセントぐらいは完全に横浜なんです。

それからこれも当然だろうと、横浜の色はどんな色でしょうかって、これは当然ブルー、マリブルーが出てくるのは当たり前なので、この中ですごく特異的に面白かったのは、実は青葉区だけが緑って答えるんです。これは昔から横浜都民といわれてて、横浜に何にもアイデンティティー持ってないという方々が青葉区に住んでいて、東急で渋谷直結となって、本当にそういう意識だよ。なるほど、ここが違うと。それから当時、住んでるのが横浜だということと、それから市民白書でいろいろ分析を、文章を書いたときに、私は横浜に住んでいます。だけど海にどのぐらい行きますかという設問に対して、年1回行きゃいいほうだというレベルですね。

それから、みなとみらいが全然まだ動きだしてないときなので、横浜ってシンボリックに言えんのはどこですかと思ったら、山下公園と中華街って出てきたんですね。多分、今はみなとみらい出てくると思うんですけども。すごく典型的だったのは、私は横浜に憧れて横浜に来ました。でも住んでるのは戸塚区です。でも年に1回か2回、海に行くのがやっとです。だけど毎日のごちゃごちゃの街の中で、雨が降りゃぬかるみの中で。

南 当然、とにかく港、横浜に憧れて来たんだけど、毎日の生活はぐちゃぐちゃな道路の中で、年1回だけ海、行きますという像が見えてきて、そういった時代だったので、それは非常に面白い捉え方だったんですけど、今、聞いてみると、その時代はもう既に終わったのかどうかというのを、もう一回、検討してほしいなと。

桂 課題意識は、同じで、なんで戸塚に住んでますって言わないんだろうねっていうのは。横浜に住んでますって言っちゃうじゃないですか。そこを変えたいなというのは、すごく議論してきたんですね。横浜じゃなくて戸塚に住んでるというのも、今、横浜に住んでるといふのと同じぐらい価値を持ってほしいなっていうふう思った。その戸塚なら戸塚とか自分たちのところの、ローカルアイデンティティーというのを持って欲しい。先ほどの話で、ちょっと違うとすれば山下公園というのは、多分あんまり、もう出てこなくて。

南 そうなんです。もう完全にみなとみらいにシフトしてることは確かですね。

桂 みなとみらいと横浜駅ですね。

南 ただ、今、実はみなとみらいに住んでいる。すごく住んでいて面白い、最初のマンションに住んだんで、ずっと約20年ずっと見てんですけどね。最初はもう砂漠みたいなところで。

桂 確かに。

南 みなとみらい線もないので、もうどうしようもない、行き来が。だけど一番面白かったのは、どういう人たちが住んだんだろうかという、3分の2は60歳以上の人が来たんですよ。それはなぜかという、警友病院があったから。つまり郊外の戸建てでは、もうこれから大変だ。今の青葉区なんて、くしの歯が抜けるように、みんな都心部のマンションに住むわけですよ。その先駆けが実は20年前に、その売り出したのが20年前だから、警友病院はあった。

南 警友病院があったから来た、というのが3分の2ぐらいいた。最初は全然コミュニティーが成り立たない、新しくみんな来てるので。私も引っ越して、いろいろ理事会その他をやったんですけど、すごく面白いのは、一番最初にコミュニティーができたのが実はペットで、イヌの散歩をしてる人たちのネットワークなんですよ。毎日同じような所、寄るので、いろいろ話をする。理事会でいろいろ議論すると、あの人こうだ、ああだといううわさ話が全部そのペットグループの中から伝わってくる。

それが4、5年たってくると、今度は子育てのママ友グループのネットワークができてきてというので、人工的につくった街というのが、どのような形でコミュニティーができていくのかは、面白いヒントにはなったなと思うんですよ。だからそんなようなことも今、みなとみらいを考えると、都心部でも新宿や丸の内の反省点で、ゴーストタウンになっちゃいけないから居住区域をつくると。

桂 19万人が就労で、居住が1万人といったやつですね。

南 そうなんですね。結局、小学校を造らないために1万人にしたけど。

桂 造りましたね。

南 この前も記事になってましたけど、最初から、小学校は10年で終わるわけないんで、どうせ20年かかるもので。

南 案の定そうなんですけど。でも、あの小学校があるおかげで、あの都心部に子どもたちが歩くわけですね。なおかつ北仲通のほうまで多分、通学路になってますよね。

桂 そうですね。

南 市役所の前まで、みんな歩いてるでしょう、子どもたち。

桂 はい。

南 子どもたちのいる都市って、こういうもんだというのをものすごい感じて、これはどう
いうふうに考えんのかなというの、ぜひ検討してほしいんですね。

桂 確かに。

南 だからそんなことで、50年間にらむというようなことでおっしゃったんですけど、
30年で相当変わってるし、これからの、またあと50年見ると子どもが激減していくし、高
齢化も中途半端ではない高齢化だし、社会が本当にネットワーク化とグローバル化うんぬ
んかんぬんで、どうなっちゃうか、経済も分かんないし。そういう中で見通すということに
なると、もっと大きいスケールで考えてもいいんじゃないかなとは思ったんで、すいません。

桂・光田 ありがとうございます。

光田 すいません、一つ前のご質問というか、ご意見に戻るかもしれないんですが、住む場
所と集まる場所と分けて都市設計をしてきたということなんですけど。未来会議をしてて
もそうですし、自分の実感としてもそうなんですけれども、今って働く時間と余暇の時間と
か、学ぶ時間とそうではない時間とかという、時間の感覚とか場所も、例えば家で仕事して
いる方が都市的な生活を住宅の近くでしたい。なので、一種低層住宅地がで、なかなか店舗
が建てられない所に用途地域を変更して、店舗が建てられるように少し用途を変えたりと
かしてるということは、恐らく人の生活スタイルが変わってきていることに対して、今まで
やってきた都市づくりとかというのが、若干合ってこないところが出てきているというの
はあるのかなというふうには思います。

ただ、それを一緒にして全部ミックスをすればいいという単純な、短絡的なことでは
ないと思うんですけども、そういった人の暮らしにフィットさせて都市づくりを考えてい
くというのは、なかなか難しいことではあるんですけども、やっていく必要があることな
のかなというふうには思っています。あと、みなとみらいのお話しただけたんですけども
も、そういうふうにして普段、子ども歩いててもなかなか接点もないし、しゃべる機会もな
いと思うんですけども、さっきの都心部のピックの話ではないんですが、普段、出会わない
方が出会ってコミュニティーが形成できたり、幸せを感じられたりとかというような居場
所づくりだとか、そういうことがセミパブリックスペースみたいなところに、これから求め
られてくるのかなというふうには思います。

今年、実は都市整備局のほうでハマウエルっていう、職員提案で関内地区に空き地を使っ
てたき火をしたりとか、パソコンを持って、そこで仕事できるみたいな空間を実験的につ
くっている実験をしたんですけども。関内の低層部もただただ、にぎわい誘導ということ
で店舗が入ればいい、カフェが入ればいいとかということではなくて、少しシェアスペース

というか、ワーク・シェア・スペースみたいなもの、運営も含めて有効な低層部の使い方ができるようところに、例えばインセンティブをプラスアルファで与えるですとか。もうちょっと一歩踏み込んだ、先ほどのセミパブリックスペースの使い方とか、そういうところも考えた制度設計みたいなことができるといいのかなというふうな、そんな議論も中ではしているところです。

南 それをお聞きすると、先ほどからずっと聞いてて、こども食堂が多分2回か3回出てきたので、はっと思ったんですけど。実は私は経験してないんですが私の妻が看護師で、東京大田区の下町の所で、本当に貧しい子がいっぱいいて、こども食堂を始めたんですけど。最初はそうだったんだけど、今度は子ども同士が仲良くなってくると、別に貧しいというか食べ物がない家庭ではなくて、ある家庭の子どもが集まると今度はお母さんが集まってきて、こども食堂そのものが地域の食堂になっちゃったというわけですよ。

多分それがいろいろ聞いてみると、そういった傾向がすごく強い。先ほど言った、例えばみなとみらいに子どもがいます、関内地区にも子どもができてきちゃって、中華街の所もいるという都心部の規制緩和、私は間違っただけでもやったかなと一瞬思ったんですけど。ことによったら、それは子どもがいるということを前提にすると、そのこども食堂みたいな仕掛けづくりとしては全然、今までとは全く違った空間づくりというのがあるかもしれないですよ。それは都心部に限っての話ですけどね。

田口ー あと10分ぐらいですね。話題がだいぶ尽きないもので。

寺澤ー いいですか。

桂 はい。

寺澤ー 皆さんのように論理的に、僕、話ができないんで、単なる思い付きのことを言っちゃうんですが、金沢区、僕も住んでて、去年の10月に地域FMができたんですよ。学生さんが主導して。パソコンで聞いているんですが、これがなかなか面白い。今、横浜では青葉と鶴見かな、地域FMがあるのがね。これが意外と、僕から見ると街づくりのツールに使える可能性がある。広報、媒体としてね。

田口 本牧にもありますね。

寺澤ー あれはでも、ちょっとエリア、もっと小さいでしょう。金沢のは横須賀の一部と磯子まで入っているみたいですが、受信エリアとしては。だから議論を今後するときには道具として地域FMというのを議論してもらったらどうかと。同じようにもう一つが、今、出た話の

中で、ちょこちょこ出ている空き家と空き地の問題。多分、横浜市もそろそろピーク過ぎてきたんじゃない？ 人口増は。

光田 はい。

桂 過ぎました。

寺澤一 昔も2030年とかいってたのかな、ピークは。ちょっと前倒しになってると思うんだけど。

桂 はい。2年連続で落ちてますね。

光田 そうですね。

寺澤一 要するに空き家と空き地の問題をどうしていくのか。僕はこれを街づくりの道具として、いかに使うかという議論をもっとしなきゃいけないんじゃないか。それをやると、それは都市デザインの仕事かどうかわかんないんだけど、さっき言われたボトムアップの一つの事例を、そこから打ち出していくということも可能になるんで、だからその辺、論理的にどうこうじゃって思い付きなんだけども、今後の議論に入れてもらえたらなとは思っています。

桂・光田 ありがとうございます。

桂 僕、南区に何の縁もなく移り住んだんですけど、空き家に空き地が付いてるという家だったんですよ。この空き地、なんか面白いからって話で、思い付きで買って住んじゃったんです。で、地域にはなかなか開こうと思っても開けてないんですけど、友達とか呼んできて飯とか、お酒飲ませる代わりに畑耕せとか、木植えろとか、そういうことをやって、みんなで育てようという活動をしてるんですけど。コロナでできなくなっちゃって、いつ再開しようかなと思ってるんですけど、そんなようなことでやってると子どもたちは確かに来るんですよ。おっちゃんたちがジュージューやってるんで、何やってんの？とか言いながら。うちの子もたちも、ちょうどその頃から保育園から小学校に上がり始めたりとかして、友達連れてきて、肉食えとか言いながら、その代わり根っこ抜くんだぞとか言って、根っこ抜かせたりとかしてるんですけど、なんか可能性ありそうですね。

寺澤一 うん。僕はみなとみらいに、実は最初のときから空き地をつくれと言っていた。多分ほとんどみんな、何やってんのという反応だった。僕が聞いた中で1ヘクタールから2ヘ

クータルぐらいを、みなとみらいの中でも空き地として用意する。30年、50年後を考えると、都市の更新をしていくときに必要な施設は新たに出てくるわけね。

桂 確かに。

寺澤一 すると埋まっていると、つくれないわけです。そのときに空いてる土地にまず先行的に、例えば今後、高齢者施設が空くはずなんです、あと20年ぐらいすりゃ。俺たち、いなくなるから。そうすると、それをすぐ売るんじゃなくて空き地として、いかに行政がキープするか。僕は財政局の人に昔、言ったことあるんだけど、小学校廃校になりましたので、売るというのですよね。将来どうなるか分かんないのに、将来また小学校用地が要るかもしれない。でも売ったら用地は確保できなくなるよ。だから売らずに、もっと違う使い方は考えられない？って言ったことあるんだけど。やっぱり財政的には売ったほうがいいという答えが出て、かなり売ったはずですよ。

そういうことも含めて、空き地というものを街づくりの中ではどういうふう位置付けて、道具として使うんだということを明確すれば、それなりに行政だと空けることができる。15パーセントが一つの限度とかが、なんかでつくと、ちょっと意見を言ったぐらいじゃ。今、全部聞いてて、えらいことになってるなというふうに思ったんですね。都市デザインというのは、ソーシャルデザインから全てをやらないといけないふう聞こえてしまうわけですね。それで意見もそういう意見が当然、出るわけで。1点確認したいと思うのは、相当なる調査研究を継続的に、しっかりディープにやってかないと結論が出ないんだと思うんですよ。

だから皆さんがフローで対応しなきゃいけない中に置かれてると思うから、その中で組織がどうにか生き延びていくとしても、結構深い議論をしっかりと、データの的にもしていかないと、今、これらのおじさんたちが長年の経験で言ってることには、とても対応できない。昔は良かったなと思って、もっと簡単だったなと思って、今、聞いてましたね。これは大変だなって、どうすんですかね。

桂 未来会議は全てを受けないといけないとも、思ってはいない。今、多分マックスに風呂敷が広がっている状態ではあるかなとは思いますが。

遠藤博一 私の友達で、たまたま都市デザインの室長さんをやった人が何人かいて、それぞれが苦勞されていた。逆に、だからこそ室長に自分がやらされたら何やるかなというのは全然考え付かなかった。未来会議の話聞いても、あれを実際に事業としてやってくのはできないし、権限も予算もなくやってた人たちだから、都市デザインの人って、そういうふうなポジションだったのね。それで、くすのき広場ってあるでしょう。あれを最初にやったときの先輩がたの苦勞をいろんな本で読んだり、話聞いたりした。あれをやってきた人たちは、

なんでああいうところの、あそこで小さなことから、ボトムアップからやれたのだろう。当時はよかったんだけど、今できないんだろうなというのは。

田口ー もう 30 分ですが、別にやめなくてもいいんだけども、そろそろ、この辺でやめますが、どうしても言いたいと、ここでというご意見があれば。

星卓志 星といいます。私の息子がデザイン室で働いています。

星 異動したのは去年かな、一昨年か。

星 私は札幌市役所で 30 年ぐらい勤めていました。なぜ札幌市役所に入ったかという、1984 年ぐらいに小樽で田村明さんが講演をして、それを聞いて大感激して。何に大感激したのかという、行政というのは街を変えられるということを初めて知ったんですよ。それで大感激して札幌市役所に入りました。横浜は昔、ちっちゃいとき住んでいたこともあって一番の憧れの都市で、先駆的なことをいっぱいやっているのを知っている。札幌市役所で働いていたときも、横浜からかなりいろいろ学んできました。なるほどと思ったんです、きょう聞いていて。私の認識だと、ここデザイン室の OB ばかりで、よく来ましたね。

桂 いや、本当にね。田口さんも、ぶっ込んでくるなって思って来てます。笑

星 私は今、どきどきしながら発言していますけど。

星 六大事業、やっぱり横浜の都市の構造をがらっと再構築するものでしたよね、フィジカルの面で。それで 50 年たって、今聞いていて生活からものを見ようと、市民の生活から見ようとしている。次、やるべきことは、50 年前の都市の構造をフィジカルに変えるという六大事業から、今生活に根差した六大事業を構築するということに、ぜひチャレンジしてほしいです。それはもう、横浜市政の基幹になったわけじゃないですか。それぐらいの勢いで新しい、市民生活に根差した六大事業をつくるということ、ぜひやってほしいなあって思いました。そのときに、今、研究してるんですけど、区域区分の話。

星 非常に面白いなと思ったのは、調整区域として 4 分の 1 残そうとした。それを守る、環境を守ることが主眼だったのだけど、その後、住宅をどんどん許可しているわけですよ。もう野放図に近いぐらいに。あれは不思議だな、とんでもないスプロール化していると思っていて、それを批判的な論文、書こうかということをやったんですけど、よく考えると、いろいろ見てると新しい居住タイプとしての住宅地を実はつくったことになるのかな。今、田園住居地域と呼ばれる地域ありますけど、そのモデルを図らずもつくった。

桂 見方によっては。

星 裏返して見れば。横浜も先駆的な都市だから、今までの価値というのを裏返して、こういう価値もあるのでないか、別の言い方をすれば。ということを含んだ六大事業を、ぜひつくってください。

桂・光田 ありがとうございます。

星 エールですから。

桂 激励です。

光田 ありがとうございます。

寺澤一 ものすごく難しい。

星 いや、当たり前ですよ。

寺澤一 何が難しいかっつうと人事なんです。人事考課なんです。というのは毎年目標を立てて評価してという、あの繰り返しの中でロングスパンの議論をできないんです。

星 そこをやるのが、都市デザインですよ。

寺澤一 だからそれを、その人事考課の壁をどうして破るか。

田口俊夫ー いや、というよりも、このテーマは、都市デザイン室で対応しているけど本当は、昔でいえば企画調整室でやるべきテーマですね。

桂 そうですよ。

田口ー 本当は市長室や、市長ブレインのセクションでやんなきゃいけないテーマですよ。哲学をやっているわけだから。その哲学から具体の施策にどう落とししていくか、その中で都市デザインの関わる範ちゅうを見つけるか、という流れまでいかないと、これはむちゃですね。

田口ー 本当にそう思う。

桂 本当にそうですね。

田口ー でも、もらっちゃったんだから、しょうがなくやられている。

桂 もともとは50周年で先輩たちの六大事業に代表されるビジョンというのは、おおむね形になってきて。多分、信じる宗教が失われてるので、この混沌を生んでるんじゃないだろうかというのがあったので、50周年のときはレジェンドたちの講演会をやるとか、展覧会を開催したりして温故知新でいうところの、故きを温めようというのを最初から目指したんですね。その上で51周年目からは知新のところをやろうと。提案かもしれないし、ちっちゃくなのか、庁内に向けてなのか分かんないけど、なんかやろうというのだけを決めてたんです、当時の企画として。

南 でも、それはフィジカルデザイン、コンセプトデザインに変えちゃっているから結構大変なことですよ。

桂 いろいろ状況が変わったんで、難しさはすごい感じてるんですよ。

光田 未来会議も都市デザインを考える会ではなかったんですね。分かりやすくいうと。

桂 そうですね。

光田 そうなんです。本当に、これからの暮らしを考えるということだけをやってみた会なので。その中で都市デザインが。

桂 何を抽出するか。

光田 そう。何を抽出するかというのは、これから。

桂 これからちゃんと冷静に考えないといけない。

田口ー 最後に一言。

関根龍太郎 関根と申します。このNPOの理事をさせていただいておりますが、僕自身は建築の人間で、都市計画も知らないし役所の人間でもないので、皆さんの先輩がたはいろいろ

心配をしておっしゃってたけど。僕も、きょうのお話を伺って非常に、市民としての感じかもしんないけど、横浜市民でもないんだけど非常に共感を持って伺っておりました。きっと大変なことになると思うけど、最後に一言申し上げたいのは、私が存じ上げてる田村明さんのスピリッツや感覚は、そこにちゃんとあるなという感じは、僕は受けましたので、そのことは一言申し上げます。

桂・光田 ありがとうございます。

関根 頑張ってください。

田口ー 千尋さん如何ですか。92歳のNPO理事長です。

田村千尋ー 一応この会は。立場上は理事長というお題をいただいておりますけれども、内容は全く素人みたいなもんです。でも田口さんとこの研究会を始めたのは、一緒にやってきた中で、今日こういう話を伺って、まだ小さな命は残っているなと思って、少しずつでもいいから励まし合ってやってくほうがいいなと思っていました。特に先輩方は厳しくやってきたことが頭にあるから。

千尋ー そっちの目で、ばーんというか、ここの辺の前の2人は、特にそういう。でも、それも大切なことだったんじゃないかと私は思いました。私は本当に一介の化学者で何も分からないんですけれども、でも、こういう雰囲気は温かいものを感じて、とてもいい会だったなと思っております。ありがとうございました。

桂 ありがとうございます。

光田 ありがとうございました。

桂 ちゃんと励ましとして伺っていましたので。

千尋ー あともう一点、言うと、田村明は今、生きてると96歳で、僕も92歳、もうすぐ93歳なんですけど、しゃべりたくなっちゃったというのは、田村明が押してくれてんのかなと思いましたが、皆さんのそれぞれのスタンディングポイントが非常に、ユニークではないんだけども个性的で面白い会だなと思いました。

田口ー すいません。どうもお二人、ありがとうございます。

光田 ありがとうございました。

桂 ありがとうございます。

(了)